

B 153 沖縄北部における海神祭の着装について
琉球大 教育 渡口文子
大谷女子短大 被服 橋本千栄子

目的 沖縄の各市町村で行われている年中行事の一つに海神祭がある。全琉各地で旧暦の5月から6月に行われる。祈願は海の幸、海上安全、村民の健康と平和を祈る行事で、行事の中でも大がかりな祭の一つである。県内、県外共に名高い部落は南部の糸満のハリー（競艇）、北部では大宜味村塩屋のウンジアミ（海神祭）が代表的である。特に塩屋のウンジアミは古代社会時代の習慣を伝統として神女達が伝承し、他村と異り、神前での神女等の着装と行動は移動する神アシアギでの変化に特色が見られる。本研究は神衣の白衣装と行動について考察をする。

方法 祭用衣服の実物計測・素材の種類調査・資料調査・神女とのインタビュー・昔の行事と現代の行事との比較

結果 北部村落は平地が少く、山を背に前面に海を抱いた部落で、海の幸・山の幸に恵まれてはいるが、交通の不便から中央との交流も少く、隣接間の交流もない社会状態で神中心の行事はほとんど変わらなく実施されていた。塩屋ウンジアミは近郷が一つになって行われている。山の手の部落から海岸の塩屋アシアギまで二つの神アシアギを経るが神女等は神衣を脱いだり、着たりし、二度目の神アシアギには古代衣裳形態の胴衣・裾で祈願し、下山には色衣裳の打かけ姿でかごで塩屋アシアギに下る。待ちかねていた庶民は神として拝み迎えられ又白衣装の打かけに替えて最後の儀式が行われて神女達の儀式は終わる。伝承される最大行事は白衣装で行われるが、小規模の行事は日常の洋式衣生活の服装で済ます傾向が多く、神中心の行事にも二面の形態が見られる。